

# 国立歴史民俗博物館所蔵『論語〔集解〕』書誌解題稿

An Annotated Bibliography of *Lunyu Jijie* in the Collection of the National Museum of Japanese History  
TAKADA Sohei

高田宗平

『論語』は我が国に古くから舶載され、受容されてきた。その中で、我が国に於いて広く講読された『論語集解』は、中国では亡佚したものの、日本にのみ伝存する佚存書であることは夙に知られている。『論語集解』の主な伝本研究は林泰輔・長田富作・武内義雄・高橋智の諸氏によって行われ、また川瀬一馬氏は古活字版研究や日本書誌学の一環として検討した<sup>(1)</sup>。近年の高橋氏の詳細な伝本の書誌調査に基づいた研究が現在の伝本研究の到達点を示している<sup>(2)</sup>。

国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略称する）には三種の『論語〔集解〕』を収蔵するが、歴博に漢籍が収蔵されていることがあまり知られていないこともあってか、先行研究では歴博収蔵本について殆どふれられていない。このようなことから、日本に於ける『論語』注釈書受容研究に寄与し、更には『論語集解』伝本の一助となることを企図し、以下に書誌事項を略記し、歴博所蔵『論語〔集解〕』の三本を紹介したい。

論語〔集解〕十卷〔室町時代後期〕刊 二冊

覆正平一九年（一三六四）年刊本 明和元年（一七六四）平敬道識語 無跋本

平敬道旧蔵・磯淳旧蔵・新町三井高堅旧蔵

H—一七〇

歴博では書名を「版本論語集解」とする。

一 形状

装訂は袋綴装冊子本、綴じ糸は改糸、糸は浅蘇芳色糸、綴じ目は四ツ目綴で、表紙は後補藍色表紙（縦二五・九×横二〇・三糎）である。

二 外題

外題はなし。

三序

本文の前に、「論語序」(何晏集解の序)が配され、第三葉表まで存す。「論語序」の款式は後述の本文のそれと同様である。

四内題

第一冊

第一卷「論語學而第一(隔三格半) 何晏集解凡十六章」

「論語爲政第二(隔三格半) 何晏集解凡廿四章」

第二卷「論語八佾第三(隔三格半) 何晏集解凡廿六章」

「論語里仁第四(隔三格半) 何晏集解凡廿九章」

第三卷「論語公冶長第五(隔三格) 何晏集解凡廿九章」

※「凡廿九章」の左傍に「注疏本爲ノ二十八章兮ノ從之」と墨書される。

「論語雍也第六(隔三格半) 何晏集解凡卅章」

※「卅」を墨滅して、右傍に「三十」と墨書される。

第四卷「論語述而第七(隔三格半) 何晏集解舊卅九章今卅八章」

「論語泰伯第八(隔三格半) 何晏集解凡廿一章」

第五卷「論語子罕第九(隔三格) 何晏集解凡卅一章」

「論語鄉黨第十(隔三格) 何晏集解凡卅一章」

第二冊

第六卷「論語先進第十一(隔三格半) 何晏集解凡二十三章」

「論語顏淵第十二(隔三格) 何晏集解凡廿四章」

第七卷「論語子路第十三(隔二格半) 何晏集解凡卅章」

「論語憲問第十四(隔二格半) 何晏集解凡卅章」

※「卅」に墨筆にて一画加え、「卅」と爲すか。

第八卷「論語衛靈公第十五(隔二格) 何晏集解凡卅章」

「論語季氏第十六(隔二格半) 何晏集解凡十四章」

第九卷「論語陽貨第十七(隔二格) 何晏集解凡廿四章」

※「凡廿四章」の左傍に「一本作二十六」と墨書される。

「論語微子第十八(隔二格半) 何晏集解凡廿一章」

第十卷「論語子張第十九(隔三格) 何晏集解凡廿四章」

※墨筆「×」を「凡廿四章」に付し、これを抹消し「凡廿四章」の左傍に「凡廿五章」と墨書される。

「論語堯曰第二十(隔三格) 何晏集解凡廿三章」

※「九」は「凡」と字形が近似しているゆえの誤りかと推測される。

五本文款式

本文の款式は、四周单边(縦二・二×横一八・二糧)、有界(界幅三・〇糧)、每半葉六行、一行二三字である。注(何晏集解)は小字双行。本文料紙は楮紙。

版心は、魚尾無く、每巻の巻数・丁付が記されている。版心の巻数・丁付の表記には三種ある。次にこれを掲げると、

「幾 幾」(第一冊各巻末葉以外、第二冊卷九の第二葉、第四葉及び末葉、同冊卷一〇の末葉)

「幾卷 幾」(第一冊の各巻の末葉、第二冊卷六の末葉、同冊卷七の初葉及び末葉、同冊卷八の第一三葉、第一八葉、同冊卷九の第五葉、第一七葉)

「幾卷幾」(第二冊卷九の初葉)

の如くである。

墨筆による返点・送仮名・堅点・傍に音訓、朱筆による句点・校異注等、朱引、行間・欄上に「師説」及び校異注等の墨書、同じく行間・欄上に朱筆の書人が各々施されている。また、朱墨の「陸本」(『經典釈文』)・「皇本」(『論語義疏』)・「宋本」(『宋刊本』)との校異注等が存する。胡粉等に

よる塗抹、墨減が散見される。なお、本文料紙は虫損が認められ、所々虫損部に裏打を施している。その他、本文料紙には、水損と思しい痕跡も存する。

六尾題

第一冊

〔論語卷第一 經一千四百七十字 註一千五百一十三字〕

※「第一」右下に「畢」と墨書、「註一千五百一十三字」の

左下に「一十七字ナシ」と朱書がそれぞれ存する。

〔論語卷第二 經一千二百一十二字 註一千九百三十一字〕

〔論語卷第三 經一千七百一十一字 註一千八百一十一字〕

〔論語卷第四 經一千五百四十四字 註一千三百七十七字〕

〔論語卷第五 經一千四百六十二字 註一千二百九十七字〕

第二冊

〔論語卷第六 經一千六十二字 註一千九百四十六字〕

〔論語卷第七 經一千三百九十四字 註一千五百五十六字〕

〔論語卷第八 經一千七百七十四字 註一千九百七十七字〕

〔論語卷第九 經一千六百五十字 註一千七百七十八字〕

〔論語卷第十 經一千二百二十三字 註一千一百七十五字〕

七葉数・丁付・遊紙

第一冊 卷一 丁付四〜十六 葉数一六葉

※序(第一〜三葉)、丁付なし。

卷二 丁付一〜一六 葉数一六葉

卷三 丁付一・□・三〜二十 葉数二〇葉

※第二葉は丁付部が虫損のため、丁付の有無が

判断できない。

卷四 丁付一〜一八 葉数一八葉

卷五 丁付一〜一九 葉数一九葉

第一冊 葉数全八九葉

第二冊 卷六 丁付一〜廿二 葉数二二葉

卷七 丁付一〜廿六 葉数二六葉

卷八 丁付一〜一八 葉数一九葉

※一九葉、丁付なし。

卷九 丁付一〜十七・十 葉数一八葉

※第一八葉の丁付、「十」に作る。

卷十 丁付一〜十二 葉数一二葉

第二冊 葉数全九七葉

第一冊・第二冊ともに、改装後に付した新補と思しい遊紙が前後に各

一葉ある。

八 識語等

第二冊末葉裏の尾題の前に、

堺浦道祐居士重新命工樓梓

正平<sup>甲</sup>五月吉日謹誌

と正平版の原刊記(正平一九年(一三六四))が墨書される。

第二冊末葉の次葉(原装の後遊紙か)表の右端部から中央部にかけて、

右論語同刻者世有三本曰和泉本<sup>即正平本也以偽朝年號今諱避而不得稱換以其</sup>

國曰明應本<sup>有跋尾別記焉</sup>曰無跋之本也<sup>敬道</sup>愚按無跋尾之

本其原刻○欺不知是否姑記愚攷耳和泉本跋尾干支

當作壬辰蓋誤

明和紀元之冬 平安 平敬道伯敷謹識

と墨筆による明和元年(一七六四)の平敬道の識語が存する。

同裏に、墨筆による四周単辺（縦一・四×横九・一糎）の匡郭を設け、明應本跋尾

今茲一書 夫子之遺言而  
漢朝諸儒所註解也寔是五經  
之輶轄六藝之喉衿也天下為  
民生者豈不仰其德矣哉  
明應龍集己未仲穉良日  
西周平 武道敬重刊

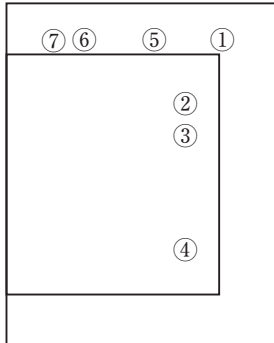
と明應本の刊記（明應八年（一四九九）が墨書される。以上の識語及び墨書は同筆と推され、平敬道の筆か。

九印記・その他

該本及びそれを保管する木箱等には多くの印記が鈐印される。

第一冊初葉表と第二冊初葉表には同様の箇所と同様の印記が纏まって存するため、その位置関係を左記の略図1で示す。

第一冊初葉表・第二冊初葉表（略図1）



- ① 単郭方形陰刻朱印（縦二・六×横二・六糎）印文不明
  - ② 単郭方形陰刻朱印（縦一・〇×横一・〇糎）「三井／高堅／之印」（三井高堅所用）
  - ③ 単郭方形陽刻朱印（縦一・〇×横一・〇糎）「聽／氷」（三井高堅所用）
  - ④ 単郭長方形陽刻朱印（縦二・六×横二・六糎）「三井家雙籠閣」（三井高堅所用）
  - ⑤ 円形朱印（直径六・六糎）印文不明
  - ⑥ 単郭長方形陽刻朱印（縦三・八×横二・三糎）「秋月春風／樓磯氏印」（磯淳所用）
  - ⑦ 単郭長方形陽刻朱印（縦二・五×横二・五糎）「聽氷壬／戌以後／所集舊／槩古鈔」（三井高堅所用）
- の七種の印記が鈐印される。
- 第一冊末葉裏の左端中央部に単郭方形陽刻朱印（縦一・六×横一・六糎）「三井／高堅」（三井高堅所用）、その下部に単郭長方形陰刻朱印（縦一・八×横一・六糎）「聽氷五十／五歳以／後所得」（三井高堅所用）（第二冊末葉の次葉〈原装の後遊紙か〉にも同様の印記あり）、更にその下部、すなわち第一冊末葉裏の左下部に双郭方形陰刻朱印（縦一・九×横一・九糎）「好古／籠以／求之」（三井高堅所用）の三種の印記が鈐印される。
- 第二冊末葉裏左下部に単郭方形陽刻朱印（縦一・七×横一・七糎）「高堅／所集」（三井高堅所用）の印記が一顆、鈐印される。
- 第二冊末葉の次葉（原装の後遊紙か）表に鈐印される①～③の三種の印記の位置関係を左記に示す。

①

右論語同刻者世有三本曰和泉本 即正平本也以偽朝年號今諱避而不得稱換以其名曰明應本 有跋尾 別記焉 曰無跋之本也 敬道 愚按無跋尾之本其原刻○歟不知是否姑記愚攷耳和泉本跋尾干支

當作壬辰蓋誤

明和紀元之冬 平安 平敬道伯敷謹識

② ③

右に掲げた如く、右上部に①単郭円形陽刻朱印（直径一・六糎）「稽古／主人」（平敬道所用カ）、左端中央やや下部に②単郭方形陰刻朱印（縦一・九×横一・九糎）「平印／敬術」（平敬道所用）、③単郭方形陽刻朱印（縦一・九×横一・九糎）「伯敷／別號／蘭丘」（平敬道所用）の三種の印記が鈐印される。

第二冊末葉の次葉（原装の遊紙カ）裏の左端に単郭方形陽刻朱印（縦一・五×横一・五糎）「三井高／堅印」（三井高堅所用）、その下部に単郭長方陰刻朱印（縦一・八×横一・六糎）「聴氷五十／五歳以／後所得」（三井高堅所用）（第二冊末葉裏にも同様の印記あり）、更にその下部に双郭長方陰刻朱印（縦二・一×横一・七糎）「後天／良堂」（三井高堅所用）の三種の印記が鈐印される。

該本を保管する木箱の蓋の内側の、右端中央部に単郭方形陽刻朱印（縦一・七×横一・七糎）「高堅／所集」（三井高堅所用）（第二冊末葉裏左下部の印と同様）、右下部に単郭方形陽刻朱印（縦四・三×横一・六糎）「三井家」（三井高堅所用）、左下部に単郭長方陽刻朱印（縦一・五×横一・四糎）「大正十／二年所／得古槧」（三井高堅所用）の三種の印記が鈐印される。

更に、木箱には、領収書が包紙に包まれ保管されている。領収書には、「大正拾参年拾月拾八日」に「新町三井」家が「東京市本郷區森川町壹番地 帝國大學正門前 大橋書店」から、該本を「七百五拾圓」で購入したことが記載される。包紙の表紙に「無跋正平版論語價金請取／大正十三年十月十八日得」と墨書される。包紙の表紙の、右下部に単郭方形陽刻朱印（縦一・一×横一・一糎）「□／□」（所用者不明）、下部に単

郭方形陽刻朱印（縦〇・八×横〇・八糎）「甲子／所得」（三井高堅所用カ）、左下部に単郭方形陽刻朱印（縦〇・八×横〇・八糎）「氷／齋」（三井高堅所用）の三種の印記が鈐印される。

各冊の書根に、「和泉本上」（第一冊）、「和泉本下」（第二冊）と小口書が存する。

第一冊・第二冊ともに、書背上部に「二」と墨書される。

正平版『論語〔集解〕』の無跋本は、高橋智氏により、室町時代後期、天文年間（一五三二～一五五五）頃を中心に刊行されたことが明らかにされている。<sup>1)</sup>従って、該書は、無跋本であることから、室町時代後期に刊行されたものと推測される。

該本は、右に掲出した、多くの印記や、領収書から、平敬道、磯淳、新町家の三井高堅に通蔵されたことが判明する。

磯淳（一八二七～一八七六）は、初名信蔵、秋月藩士。大橋訥庵・藤森弘庵に学び、その後、秋月藩藩校稽古館教授となる。維新後、秋月藩少参事、明治九年（一八七六）神風連の乱に呼应し、旧秋月藩の士族宮崎車之助・今村百八郎等とともに挙兵する（秋月の乱）も、鎮圧され、自刃した。<sup>3)</sup>

新町家は、三井高利の三男高治を初代とする家で、三井十一家のうち本家と呼称された六家の一つである。高堅（一八六七～一九四五）は連家の一つ松坂家七代高敏の三男、号は聴氷、新町家八代高辰の養子となり、その後新町家九代当主となる。源右衛門を襲名。三井呉服店・東神倉庫・三井物産・三井銀行の各社長、三井鉱山代表取締役、三井家同族会理事、三井合名会社代表社員副社長・業務執行社員、等を務め、三井財閥の中枢にあつて同財閥の主要企業の社長・役員を歴任した。<sup>4)</sup>

三井記念美術館には高堅が蒐集した中国古拓本が収蔵され、聴氷閣コレクションとして、夙に知られている。その他、高堅蒐集旧蔵の典籍

資料は、国文学研究資料館に聴水閣収集古文書（中世文書・近世文書）、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館に聴水閣文庫が存する。

第二冊末葉の次葉表の識語を記した「平安 平敬道」について詳らかではないが、住吉朋彦氏によると、北野天満宮所蔵の明応八年（二四九九）刊本『論語集解』に「平安 平敬道士躋謹識」の名と「稽古齋圖書」の印記が存し、平敬道が家蔵本を北野社へ献納したことが記されていることから、平敬道は無跋本と明応本を蔵しており、該本に明応本の刊記を移録したと言<sup>5)</sup>う。

なお、該本は、弘文荘待賈古書目四五号『弘文荘古版本目録』（弘文荘、一九七四年）一四二頁の「133」、『反町茂雄追善弘文荘善本図録』下（弘文荘、一九九七年）二一四頁の「648」に著録される。このことから、該本は反町氏の手を経ていることがわかる。

#### 論語〔集解〕十卷 慶長四年（一五九九）刊 一冊

慶長勅版 古活字版

コレクシヨン名称 反町茂雄旧蔵典籍古文書

H—一六九

歴博では書名を「版本論語（慶長勅版）（古活字版）」とする。

#### 一 形状

装訂は袋綴装冊子本、綴じ目は五ツ目綴で、表紙は江戸時代以後補されたと推測される巾繫地唐草紋様型押丹表紙（縦二八・八×横一九・九糎）である。

#### 二 外題

表表紙左肩に墨筆による書き題簽「論語 全」（縦一九・一×横三・三糎）が貼付される。

#### 三 見返

表表紙見返に、子持輪郭（縦一四・七×横九・五糎）を設け、その内側に「<sup>論語慶長</sup>己亥刊行」と刊記がある。慶長己亥は慶長四年（一五九九）である。また、表表紙見返裏側に墨筆による花押が存する。この花押は後述する如く、第六四葉裏の左下部に存する花押を同筆と推察される。

#### 四 序

本文の前に、「論語序」（何晏集解の序）が配され、第二葉表まで存する。「論語序」の款式は後述の本文のそれと同様である。

#### 五 内題

内題は左記の如くである。

第一卷 「論語學而第一」

「論語爲政第二」

第二卷 「論語八佾第三」

「論語里仁第四」

第三卷 「論語公冶長第五」

「論語雍也第六」

第四卷 「論語述而第七」

「論語泰伯第八」

第五卷 「論語子罕第九」

「論語鄉黨第十」

第六卷 「論語先進第十一」

〔論語顔淵第十二〕

第七卷〔論語子路第十三〕

〔論語憲問第十四〕

第八卷〔論語衛靈公第十五〕

〔論語季氏第十六〕

第九卷〔論語陽貨第十七〕

〔論語微子第十八〕

第十卷〔論語子張第十九〕

〔論語堯曰第二十〕

### 六 本文款式

本文の款式は、左右双辺（縦二五・二×横一六・二糎）、有界（界幅二・〇（二・二糎）、每半葉八行、一行一七字である。単經本である。本文料紙は楮紙。版心は、三黒魚尾（上部から、双魚尾 対向、単魚尾 下向）、大黒口、双魚尾の内側、すなわち中縫に版心題「論語幾」、単魚尾の上辺に丁付が各々記されている。

稀に朱筆による鈎点、朱引等が存する。

### 七 尾題

尾題は左記の如くである。

〔論語卷第一〕（本文末行と接行）

〔論語卷第二〕（本文末行と接行）

〔論語卷第三〕（本文末行と接行）

〔論語卷第四〕（本文末行と接行）

〔論語卷第五〕（本文末行から隔二行）

〔論語卷第六〕（本文末行と接行）

〔論語卷第七〕（本文末行と接行）

〔論語卷第八〕（本文末行と接行）

〔論語卷第九〕（本文末行と接行）

〔論語卷第十〕（本文末行から隔二行）

八葉数・丁付・遊紙

論語序

丁付一・二

葉数二葉

卷第一 学而第一～卷第五 郷党第十

丁付一～二十七

葉数二七葉

卷第六 先進第十一～卷第十 堯曰第二十

丁付一～三十五

葉数三五葉

全六四葉

なお、遊紙は前後ともになし。

右に記した如く、卷第一 学而第一～卷第五 郷党第十に「一」～「二十七」、卷第六 先進第十一～卷第十 堯曰第二十に「一」～「三十五」と各丁に丁付が刻されていることに鑑みて、元來は上下二冊本であったものを、江戸時代に合綴したかと推測する。

本項ではこれ以後、便宜上、卷第一 学而第一～卷第五 郷党第十を上巻、卷第六 先進第十一～卷第十 堯曰第二十を下巻を称する。

上巻一〇葉裏の第一行欄脚に「十」、上巻第二七葉裏に「□」<sup>三十七</sup>、下巻

第一七葉裏の第二行欄上に「四十三」、下巻第二三葉裏の第一行欄脚に「五十」、下巻第三三葉裏の第一行欄脚に「六十」と各々墨書され、下巻第二四裏の第二行～第三行の欄上に淡墨にて「五」と記されている。

### 九 花押

末葉裏（下巻第三五葉裏）の第六行～第八行の下部、すなわち左下部に墨筆による花押が存する。これは、前述の如く表紙見返裏側に墨筆

よる花押と同筆と推察される。ただし、現時点の稿者には花押について鄙見を提出することができず、今後の課題としたい。なお、後掲の弘文荘の目録・図録に於いて、反町氏は花押について「その人を明らかにし得ない。恐らく卜部吉田家の人の署であろう」と指摘する。

#### 十印記・その他

末葉裏の尾題の下部に単郭長方陽刻朱印（縦一・三×横〇・六糶）「月明荘」（弘文荘反町茂雄所用）が一顆、鈴印される。書根に墨筆による「論語全」と小口書が存する。

該本は外箱と内箱の二箱に保管されている。外箱は素桐台座、内箱は素桐印籠蓋造で、外箱の蓋に「勅版 論語」、内箱の蓋に「後隆成天皇勅版 論語

慶長四年刊  
古活字版 極上本」とそれぞれ墨書される。

慶長勅版は後陽成天皇の勅命で印刷刊行された古活字版で、『論語（集解）』以外、『古文孝経』・『孟子』・『錦繡段』・『日本書紀神代卷』・『職源抄』等が刊行された。<sup>(6)</sup>

なお、該本は、弘文荘待賈古書目 四二二号『弘文荘古活版目録』（弘文荘、一九七二年）一二頁の「6」、『反町茂雄追善 弘文荘善本図録』下の二一四頁の「626」に著録される。弘文荘の目録・図録に掲載されていること及び反町氏の印記が鈴印されていることから、反町氏の手を経ていることがわかる。前述した如く該本に署された花押が何者によるものか不詳である。

ただし、反町氏は、昭和二四年（一九四九）三月に赤坂の旧子爵吉田良兼氏（一九一〇～一九八〇）を訪ね、吉田家襲蔵の典籍古文書を披見し仕入れ、同家の典籍古文書の中に『日本書紀神代卷』・『古文孝経』・『論語（集解）』・『孟子』の慶長勅版四種が含まれ、これら慶長勅版は神道書とともに土蔵に納められていたことを記している。反町氏は吉田家襲蔵の慶長勅版『論語（集解）』について、「吉田家は保存の良い美本だっ

た記憶はあるが、カードを紛失したので、詳細は不明。納め先は、中山（中山正善氏―稿者注）さん・ホーレー（フランク＝ホーレー氏―稿者注）さん・岡田真さんのいずれかだったと思いますが、定かではありません」等と述懐し記している。<sup>(7)</sup>以上の記述から、反町氏は吉田家襲蔵本に花押が署されたことを手がかりに前掲の弘文荘待賈古書目 四二二号『弘文荘古活版目録』並びに『反町茂雄追善 弘文荘善本図録』下に於いて、花押を卜部吉田家の人物によるものと推測したと考えられ、これらを勘案すると、該本は吉田家襲蔵本であった可能性が高いであろう。

#### 論語（集解）十卷（江戸時代）後印 一冊

天文二年（一五三三）跋刊

伏原宣光旧蔵

コレクシヨン名称 高松宮家伝来禁裏本  
H一六〇〇―九七八（カ一五―一一）

#### 一 形状

装訂は袋綴装冊子本、綴じ目は四ツ目綴で、表紙は後補亀甲繫地竜文型押縹色表紙（縦二八・五×横一九・五糶）である。

#### 二 外題

表表紙左肩に墨筆による書き題簽「論語 全」（縦一八・一×横三・五糶）が貼付される。なお、題簽の料紙は墨流しが施される。

#### 三 三序

本文の前に、「論語序」（何晏集解の序）が配され、第二葉裏まで存する。「論語序」の款式は後述の本文のそれと同様である。



四内題

内題は左記の如くである。

第一卷「論語學而第一（隔二格）何晏集解」

「論語爲政第二」

第二卷「論語八佾第三」

「論語里仁第四」

第三卷「論語公冶長第五」

「論語雍也第六」

第四卷「論語述而第七」

「論語泰伯第八」（述而第七の本文末行から隔一行）

第五卷「論語子罕第九」

「論語鄉黨第十」

第六卷「論語先進第十一（隔二格）何晏集解」

「論語顔淵第十二」

第七卷「論語子路第十三」

「論語憲問第十四」

第八卷「論語衛靈公第十五」

「論語季氏第十六」

第九卷「論語陽貨第十七」

「論語微子第十八」

第十卷「論語子張第十九」

「論語堯曰第二十」

五本文款式

本文の款式は、四周单边（縦二〇・五×横一七・八糎）、有界（界幅二・六糎）、每半葉七行、一行一四字で、単經本である。料紙は楮紙打紙かと思われる。

版心は、単黒魚尾、上向、中黒口、版心題無く、中縫に丁付が記されている。

墨筆の返点、送仮名を白塗沫している。間々白塗沫の上に墨筆にて江戸時代前期頃かと思われる訓点を付す。朱筆の句点・鈎点・補入符・傍らに片仮名にて音、朱引を付す。

墨筆の「常本」「二本」、朱筆の「常之本」「常ノ本」「一本」、淡墨の「流傳之本」の各校異は、同筆である。

学而第一の巻首欄上に、

「論語卷上

日本清原宣條校

学而第一第一九十六章

丨丨丨丨丨丨丨丨

丨丨丨丨丨丨丨丨

丨丨丨

丨丨丨丨丨丨丨丨

每章効之

先進第十一の巻首欄上に、

「論語卷下

清原宣條校

先進第十一九二十四章」と、それぞれ朱書きされる。両朱書は同筆

である。また、内題下部の朱書「凡幾章」とも同筆である。以上の朱書

は、江戸時代中期〜後期に書入れられたものかと思われる、更に先に示した墨筆・朱筆・淡墨の校異とも同筆かと推測する。

六尾題

尾題は左記の如くである。

「論語卷第一」

〔論語卷第二〕

〔論語卷第三〕

〔論語卷第四〕

〔論語卷第五〕（郷党第十の本文末行から隔一行。尾題後の三行分は

墨釘）

〔論語卷第六〕

〔論語卷第七〕（憲問第十四の本文末行から隔一行）

〔論語卷第八〕

〔論語卷第九〕

〔論語卷第十〕（堯曰第二十の本文末行から隔一行。尾題後の一行分

は墨釘）

七葉数・丁付・遊紙

論語序

丁付 一・二

葉数 二葉

卷第一学而第一～卷第十堯曰第二十

丁付 三～八十七

葉数 八六葉

全八八葉

遊紙は前後ともになし。

八跋

尾題「論語卷第十」の次葉に、

泉南有佳士厥名曰阿佐井野一日

謂予云東京魯論之板者天下寶也

雖然離丙丁厄而灰燼矣是可忍乎

今要得家本以重鏤梓若何予云善

按 應神天皇衛宇典經始來 繼

體天皇衛宇五經重來自尔以降吾

朝儒家所講習之本藏諸秘府傳於 〔末葉表〕

叔世也蓋唐本有古今之異乎家本

有損益之失乎年代浸遠不可獲而

測遂撰累葉的本以付与庶幾博雅

君子糾焉

天文癸巳八月亥乙

金紫光祿大夫拾遺清原朝臣宣賢法名宗尤（末葉裏）

と、泉南の阿佐井野氏が清原家の家本を基に出版したことを示す、天文

二年（一五三三）八月の清原宣賢の跋文が付される。

九印記・その他

卷首右部に、上から順に、天地単郭左右双郭長方陰刻朱印（縦二・七

×横二・〇糎）「伏原」、単郭円形陽刻朱印（直径一・六糎）「清／原」、

単郭方形陰刻朱印（縦二・五×横二・五糎）「宣光／之印」（伏原宣光所用）

が各一顆、鈐印される。

各篇首の書耳の表に「學而一」、同裏に「學一」の如く、表に「篇名幾」、

裏に「篇名の略称幾」が墨書される。

書根に墨筆による「何晏論語集解 全」と小口書が存する。

該本は、印記から、高松宮家所蔵となる以前は、伏原宣光の旧蔵で

あったことが看取されるが、宣光以前の伝来経緯は不詳である。伏原宣

光（一七五〇～一八二七）は宣条の男、民部少輔・主水正・少納言・明

経博士等を歴任し、正二位となった。

右に示した「伏原」、「清／原」の両印記が、伏原・舟橋（船橋）両家

の誰の所用印であったか未詳である。また、前述した墨筆・朱筆・淡墨

の書人についても、誰によるものか現時点では未詳である。これらを明

らかにするには、今後、舟橋・伏原の両家の旧蔵典籍資料の調査・検討

が必要となる<sup>(8)</sup>。今後の課題である。

該本は所謂、天文版論語・阿佐井野版論語と呼ばれる版本の江戸時代の後印本と推定される。該本の初印本の版木が太平洋戦争前まで堺市の臨濟宗寺院の南宗寺に伝わっていたことから、南宗寺版論語とも称される。

なお、該本は、〈国立歴史民俗博物館資料目録「8-1」〉『高松宮家伝来禁裏本目録』『分類目録編』（国立歴史民俗博物館、二〇〇九年）、〈同「8-2」〉『同』『奥書刊記集成・解説編』（国立歴史民俗博物館、二〇〇九年）に著録される。

以上、歴博に収蔵される三種の版本『論語〔集解〕』の書誌事項を簡単に記してきた。三本は何れも本格的な研究は行われておらず、研究の組上に載っていない。本稿が些かなりとも、今後の我が国に於ける『論語』注釈書受容の研究や『論語集解』伝本研究等の一助となれば幸いである。

〔謝辞〕

本稿の執筆に係る資料の熟覧調査に際し、大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館管理部博物館事業課資料係主任（本稿執筆・投稿時、同部研究協力課国際交流係主任。本稿校正時、同部博物館事業課資料係専門職員）森谷文字氏、京都大学附属図書館情報サービス課特殊資料掛長（現、同課参考調査掛長）櫻井待子氏に御高配を賜り、誠に御世話になった。両氏に衷心より御礼申し上げる次第である。

註

- (1) 林泰輔編『論語年譜』（大倉書店、一九一六年。後に修訂版、国書刊行会、一九七六年）、安井小太郎『正平版論語集解題』（斯文会、一九二二年）、川瀬一馬『正平版論語攷』（「斯文」一三編九号、一九三一年。後に「正平本論語攷」に改題し加筆して川瀬一馬『日本書誌学之研究』（大日本雄辯会講談社、一九四三年）所収、『論語善本書影』（貴重図書影本刊行会、一九三二年）、①武内義雄『正平版論語源流攷』、②長田富作『正平版論語之研究梗概』、③今井貫一『正平版論語影印に就て』（以上の①から③今井貫一編『正平版論語集解 正平版論語集解攷』（正平版論語刊行会、一九三三年）所収。①は後に『武内義雄全集 第一卷 儒教篇一』（角川書店、一九七八年）所収。前半部を「本邦旧鈔本論語の二系統」と題して武内義雄『論語之研究』（岩波書店、一九三九年）所収、長田富作『正平版論語之研究』（大阪府立図書館内同人会、一九三四年）、『論語秘本影譜』（斯文会、一九三五年）、武内義雄『論語之研究』（岩波書店、一九三九年。後に『武内義雄全集 第一卷 論語篇』（角川書店、一九七八年）所収。先述した如く「本邦旧鈔本論語の二系統」は『武内義雄全集 第二卷 儒教篇一』に再録される、高橋智①『慶長刊論語集解の研究』（『斯道文庫論集』三〇輯、一九九六年）、同②『慶長刊論語集解の研究（承前）』（『斯道文庫論集』三一輯、一九九七年）、同③『室町時代鈔本「論語集解」の研究』（汲古書院、二〇〇八年）、同④『南北朝時代古鈔本「論語集解」の研究——猿投神社所蔵本の意義——』（『斯道文庫』四三輯、二〇〇八年）の他、川瀬一馬『増補古活字版之研究』上巻／下巻図録篇（The Antiquarian Booksellers' Association of Japan、一九六七年）に於いても言及されている。
- (2) 前掲註(2) 高橋智③『室町時代鈔本「論語集解」の研究』によると、中世の『論語集解』の系譜は、以下のように概観できると言う。
- 清家点本——宣賢点本——伝鈔本
- 正平版論語
- 影鈔本・伝鈔本
- 寺院系諸本（義疏竄入本）
- (3) その他、磯淳旧蔵漢籍には、例えば、早稲田大学図書館所蔵『玉篇』卷第九（国宝）、神宮文庫所蔵『論語義疏』を挙げることができる。「秋月春風／樓磯氏印」が捺される磯淳旧蔵典籍の多くは、神宮文庫、九州大学附属図書館に蔵されている。山室三良「国宝玉篇と磯淳の最後」（山室三良『生かされて九十年』（石風社、

一九九五年）所収、久保尾俊郎「磯淳の旧蔵書」（『ふみくら』No.79、二〇一〇年）を参照。なお、久保尾氏は当該注所引論文に於いて、「弘文荘版本古目録『正平版論語』」の存在を指摘している。歴博所蔵本のことであろう。

(4) 三井高堅及び三井家については、『三井事業史』本篇 第一巻／第三巻上（一九八〇年、三井文庫）、『同』本篇 第三巻中（三井文庫、一九九四年）、『同』本篇 第三巻下（三井文庫、二〇〇二年）、三井文庫編『三井家文化人名録』（三井文庫、二〇〇二年）に拠る。

(5) 住吉朋彦「国立歴史民俗博物館蔵五山版目録解題」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一八六集、二〇一四年）。本稿の投稿後に、住吉氏の目録解題が公開された。同目録解題は伝本との版種の関係から伝来に及ぶ詳細なもので、本稿修正時に参考にした。

北野天満宮所蔵明応八年刊本『論語集解』は、柴田純・藤井讓治・安国良一編『北野天満宮和書漢籍目録』（北野天満宮、一九九〇年）に「論語〔明応本論語〕」（分類番号四一―一〇二（宝一五））の書名で著録される。同目録には、北野天満宮所蔵和書漢籍に見られる多くの印記の印影を収める。「稽古齋圖書」印の印影も同目録に所収。その他、前掲註（一）川瀬一馬論文を参照。なお、原本は未見。

(6) 慶長勅版の刊行事情については、前掲註（一）川瀬一馬『増補古活字版之研究』上巻、安野博之「慶長勅版の刊行について―慶長四年刊本を中心に―」（『三田国文』三二号、二〇〇〇年）を参照。

(7) 反町茂雄『二古書肆の思い出』4 激流に棹さして（平凡社、一九八九年）「I 古書界の動乱、最高潮に達す（昭和二十四年）」4 吉田子爵家秘蔵の神道文庫の分散」に拠る。

(8) 例えば、京都大学附属図書館清家文庫所蔵の、『易抄』（清家文庫 一―六二／エ／七貴）、『尚書抄』（清家文庫 一―六三／シ／七貴）の両書には「伏原」、「宣光／之印」の両印記が鈐印されている。

（国立歴史民俗博物館研究部非常勤研究員（研究支援者）、  
国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇一四年七月二十八日受付、二〇一五年一月二十六日審査終了）